

新聞と雑誌

●家庭と雇人 安部磯雄氏

昔風の考へは雇人といふものは、どうにでも此方の思ふ儘に使つてもよいものだ、一種の奴隷のやうに視て居りましたから、雇人を以て家族の者とば全く段階の違ふ人種かのやうな考へは、今日でも習慣的に多數の人の頭に残つて居りますが、かういふ考へまづ第一に取去つて仕舞はなければなりません。日本では女中などを雇ひ入れる場合には、雇ふ方が雇はれる方の年や身元や人柄や、これまで雇はれてゐた家などを聞質すのでありますが、亞米利加や英吉利あたりでは、反對に下婢などにすみ込まうとする方が、雇はうといふ家の事情を取調べて、行つてもよいと思ふと、自分の方から様々の條件を提出します子供扱ひは一切しないとか、日曜日の外に木曜の午後にも外出を約束したいとか、その外種々のことを云ひたて、それが承知なら雇はれませうといふ態度です。雇ふ方が自分の氣に入つたものを雇ふといふのでなく雇はれ

る方が氣にいつた家に雇はれてやるといふやうな風であります併しこんな極端な西洋の例に倣つて徹頭徹尾契約づくめに病人が出來た、めに、是々餘計な仕事をしたら何れ文金を拂へとか、また拂ふとかいふやうな使ひ方をするのがよいかと云ふと、雇主と雇人といふ區別はあるけれども、同じ家に生活してゐるもの同士が、かういふ冷やかな理屈づくめで相對してゐるといふのは、實に好ましくないことでありますから私はどうしても雇人を以て、自分の家族の一人として之を待つといふことでなければならぬと思ひます。詳しく云ひますと、所謂他人の家に奉公に出る人などは、何れも教育の足らないものであるのですから、雇入れた時から自分の家族と思つて、主婦たるものは、唯自家のために働かせる許りでなくそのもの、將來のために或は裁縫のみちを教へたり、また一通りの讀みかきでも教へる位にし、よい機會があつたならば嫁入の出來るやうにしてやる位まで行届きたいものだと思ひます。又食物なども家族の食物とあまり懸隔のない位のものにしてよからうと思ひます。さうして官吏などの

長く一つ所に職を奉じた人には、退職の後にもそれ／＼恩給があるやうに、下婢にして誠實に自分の家庭を助けてくれたものには、他に嫁入りでもした後でも、一種の親戚同様に長く自分の家に入出入りするやうにしたいと思ひます(家庭女學講義)

●旅行雑感 文學博士村上專精氏談

一昨十五日學士會で開かれた動物虐待防止會例會の席上で、文學博士村上專精氏は、今夏旅行中の所感を語られたり、今左に其の概要を録せん

▲感情の力 七月六日の夜行列車で新橋を發し西下したが、瀛車中で新聞を見自殺者の多いとに驚いた、同月八日の大阪毎日に此種の報道が六つもあつたのである、其中に京都の高壘寺で情死した男の、十四になる子に遺した手紙の文面を見ると中々立派なもので、斯様な馬鹿な眞似をする人間とは思へない、夫から第十一師團の一軍曹も同一の所業をしたが、其遺書も先づ華嚴經に曰くと云ふ風に出て居る、此二者は其文面丈から想像しても相當に教育あり理性の力もある人の様に思へるが、遂に感情の爲に支配されて了つた、そこで余は理性の力

の情の力に勝つことの困難なるものなるを感じた次第である。

▲屋物好の稻荷 佐賀縣の鹿島といふ所に十日許り滞在した、此地は鍋島十番の舊領地である、舊藩主が英明の君であつたので教育は中々盛であるが、爰に一つ意外に思ふたことがある、夫は三河の豊川稻荷と甲乙ないと思はる、程繁昌な稻荷のものである一體稻荷の供物と云へば何處でも油揚と赤の飯に定まつて居るが、此處の稻荷は玉子とか鶏など腥さ物のみを供へる、此社の神主に招待されて種々御馳走になつたが、後で聞けば皆其のお下り物だと云ふのであつた……狐のお下りを食へたのは始めてあつた……思ひ起すと藩主は舊藩時代江戸に参勤する折、宿所々々で必ず一行人数以外一人分丈餘計に膳立をしたものである、それは云ふ迄もなく此稻荷に供へるのであるが何時の間に残らず食へられて居るといふとであつた、是は稻荷が藩主の一行を護つたのだといふ此の如くであるから信心者の多いことといふものは、非常なるものである……迷信といふものゝ勢力は實に偉大なるものではありませんか、

▲佐賀學生の美風 佐賀は市街としては其い處ではない、が教育は非常に盛である、隨て學校も人口の割合に多い、それは兎に角に學生は全く質素で、東京で見る様なものは居ない聞く所によると料理屋などに行くものがあれば、一同冷笑し仲間に入れないと云ふ有様であるそつだ、現に余は市中に一つ一軒の東京でありふれた様な牛肉店をも見なかつた、要するに佐賀學生は所謂『書生は草根を咬む』底の事實を現はして居る此美風を永く續かせたいものである斯くて博士は、唐津で隣室に居つた支那人の不潔に閉口せしと、或は下の關、丹波、京都を經たることを一言し、話頭一轉

▲智識の發達程度 及びて曰く『嘗て博士井上圓了氏の令弟で、哲學書院を計營した人が云はれたとがある、書籍の賣れ行き如何に依て其地方の教育程度を察し得る、大體から云ふと（記者曰く北日本に就ての）北陸は駄目で、東北は意外に好況である、北陸地方は概して佛教の盛な處であるから、そんな譯はなからうと思ふが、よく調べて見ると、これが事實であつて、北陸は習慣的に宗教に熱心であるが、唯だ習

慣を襲守するのみで、進取の氣象が乏しい、然るに東北は之と反對である、一例を云へば北陸で或郡長が如裝掛で奔走し廻はつても一般の人民が奮ひ起らぬ、之を以て見ても他は察し得るであらう」と云ひつゝ、種々實際に就て語られ「教育と宗教とは伴ふて進み、始めて眞の發達を見るであらう」と結論せられたり

●文相の教育談 學生の品性陶冶に關する目的を達せんことは勿論教育上至難の事なるも其實今日の教育家中其青年生徒の道德的品性を訓練することに關し極めて熱心なる幾多の博士並に教育あり此人々は勿論我が國本たる忠孝の二義を説き是に關する内外歴史上の事實より自己の躬行實踐を以て生徒を指導する者なり

▲是等の教育家は其生徒をして學校時間以外に時代の誘惑に陥らざらしめんが爲め或は遠足に運動會に音楽會に演說會に誘ふ等種々の有益なる企畫を以て常住居臥生徒の品位を訓練するに勉めつゝありて其功果實に驚く可きものあり

▲唯茲に困難なるは經濟問題にして通例各

寧校を通じて斯かる教育家即ち英米にて所謂メートル又はメートルンタル品位陶冶の教育家を措て寧ろ多識多聞の學士教師等を招聘する結果は自然と學生の品性陶冶に缺くる所あるに至りたる等は思ふに今日の所謂學生風紀問題の起りし一原因には非ざるが云々

會員 移動

轉居

福岡市博多中島町 森岡たか
 臺灣臺南西竹園街 大室えい
 小學校官舎甲二十九
 入會

福岡縣企救郡打網村平井とむえ
 東京市牛込區南町二十八番地

幣原 妙子

會費領收 (至明治三十九年八月二日)

報告

金額	拂込月日	姓名	金額	金額	姓名
三〇〇	(自七月至九月)	近澤 岩吉	三〇〇	三〇〇	酒井 冬子
三〇〇	(自七月至九月)	瀧山 幸	三〇〇	三〇〇	松本 繁子
三〇〇	(自七月至九月)	松本そとえ	三〇〇	三〇〇	山田 マス
三〇〇	(自九月至十一月)	伊藏 ぎん	三〇〇	三〇〇	武田 まつ
三〇〇	(自七月至九月)	福岡 吳子	三〇〇	三〇〇	堤 てつ
三〇〇	(自七月至九月)	山中 下枝	三〇〇	三〇〇	關谷 いま
三〇〇	(自七月至九月)	水野 ます	三〇〇	三〇〇	白井 初枝
三〇〇	(自七月至九月)	長谷川りん	三〇〇	三〇〇	太田 よね
三〇〇	(自七月至九月)	長興のぶ子	三〇〇	三〇〇	田坂 りつ
三〇〇	(自七月至九月)	長尾 みね	三〇〇	三〇〇	佐藤 むめ
三〇〇	(自七月至九月)	鳥居 しげ	三〇〇	三〇〇	矢野 房代
三〇〇	(自七月至九月)	清家寛次郎	三〇〇	三〇〇	大山 千代
三〇〇	(自七月至九月)	櫻井 光華	三〇〇	三〇〇	箱石 孝藏
三〇〇	(自七月至九月)	伊藤 五姬	三〇〇	三〇〇	加藤 たけ
三〇〇	(自七月至九月)	小林 徳	三〇〇	三〇〇	山田 糸子
三〇〇	(自七月至九月)	鳥菌 つね	三〇〇	三〇〇	春田 隆
三〇〇	(自七月至九月)	三谷 鏡	三〇〇	三〇〇	鍋島 いし
三〇〇	(自七月至九月)	柳井 つる	三〇〇	三〇〇	松山 いつ
三〇〇	(自七月至九月)	服部 たき	三〇〇	三〇〇	石幡 富子
三〇〇	(自七月至九月)	安藤 たみ	三〇〇	三〇〇	吉田じゆん
			三〇〇	三〇〇	加藤 常子
			三〇〇	三〇〇	野口 ゆか
			三〇〇	三〇〇	井川 いさ
			三〇〇	三〇〇	志村 たか